

～岩手県の中山間地域を元気づけるプロジェクト～

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：農業生産活動がもたらす中山間地域への波及効果について

研究代表者：総合政策学部 教授 吉野英岐

課題提案者：岩手県農林水産部農村計画課

研究メンバー：鷲野健二、小野寺健一、菊池俊次、吉田長貴(岩手県農村計画課)

技術キーワード：いわて農業農村活性化推進ビジョン、モデル地区、学生提案

▼研究の概要(背景・目標)

岩手県は「いわて農業農村活性化推進ビジョン」を策定し、本格的な対策に乗り出している。ビジョンの策定・実施によって、農業振興による所得向上や雇用創出等の具体的な成果を生み出すべく、その手法開発と提示が喫緊の課題になっている。

▼研究の内容(方法・経過)

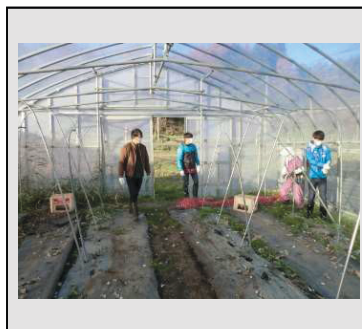
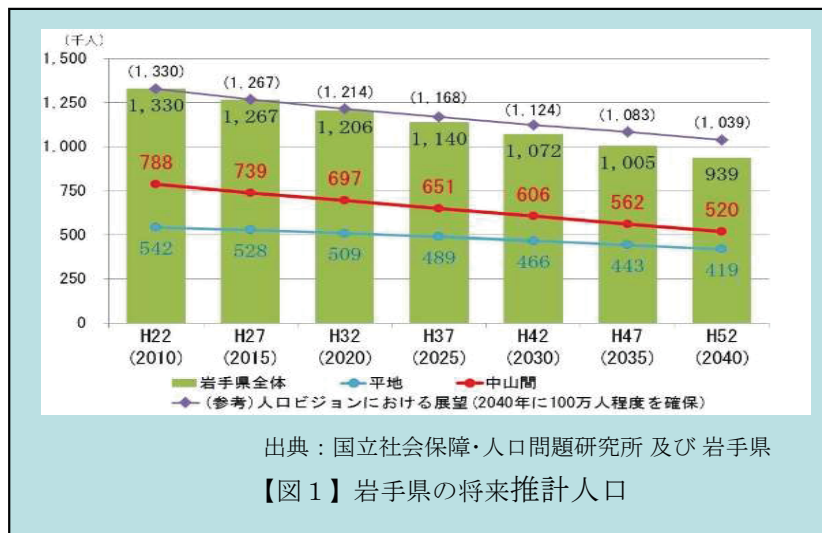
- 1.調査対象 洋野町大沢地区と釜石市橋野町地区
- 2.調査内容 ビジョンの実現に向けた課題の整理、解決策の提示
- 3.調査期間 2016年10月、2017年2月
教員とが学生10名程度が1泊2日で訪問して、ワークショップ等を実施

▼研究の成果(結論・考察)

- 1.洋野町大沢地区では、特産品化を進めているキュウリの規格外品を活用したキュウリ風呂を提示。冬季イルミネーションについて、エントランス付近や入浴施設に飾ることで、来場者の興味を引き付ける方を提案。
- 2.釜石市橋野町地区では、梅の栽培と生産、加工にむけて、美しい梅園、梅の加工品づくりなどが提案された。

▼おわりに(まとめ・今後の展開)

- 1.「いわて農業農村活性化推進ビジョン」の策定とモデル地区における活動はまだ緒についたばかりである。今後はこの施策が効果をあげていくために、有効な支援策や実施的な成果の測定を行っていく必要がある。
- 2.今後は活動の持続的な展開に必要な条件や要員の把握、そのための実践力を向上させる仕組みづくり、そしてビジョンの策定、実践に取り組む中山間集落の発掘と拡大を実現していかなければならない。
- 3.モデル地区における農業がもたらす様々な波及効果を地域活性化に取り組む集落や、行政機関、農業団体等の関係機関が共有していくこと。



操作なしで、自動的に解説するサービス

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：急増する外国人観光客の県内誘客促進、かつ満足度向上を図り、
地域経済の活性化に寄与する「独創的ITシステム」の活用法研究
研究代表者：ソフトウェア情報学部 准教授 蔡 大維
課題提案者：杉田 洋平(株式会社JTB東北 法人営業盛岡支店)
研究メンバー：武石 幸久 ((公財) 盛岡地域地場産業振興センター)
技術キーワード：観光振興、震災復興、自動音声案内

研究の概要 (背景・目的等)

近年、外国人観光客が急増し、多言語対応への必要性が高まっている。しかしながら、地方にとって通訳やガイドといったマンパワーの恒常的確保は経済面の保障をはじめ、様々な要因から相当困難である。とは言え、多言語対応を放置することは、情報発信を放棄することであり、結果的に理解促進を阻害してリピーターの獲得を妨げるばかりでなく、そもそも来県の外国人観光客を遠ざけることに繋がりがかねない。日本政府のインバウンド目標は、急増を受けてたびたび上方修正され、2020年までに4,000万人、東北6県+新潟で150万人である。ただし、最新の報道によると達増知事は「東北6県と新潟県合計の外国人観光客は15年に約70万人だったが、今年は100万人が目標。東京オリンピックが開催される2020年に450万を目指すとの目標を政府が策定しており、2倍～3倍に増えると期待している」と言明している。しかしながら、仮に目標通りの外国人観光客が来県すると、県内観光地では大混乱が生じると予想される。なぜなら、可及的速やかに次に述べる整備が必要になるからである。早急な整備自体も混乱要因であるが、未整備などところに外国人観光客が押し寄せるとなると、混乱に一層拍車がかかることになる。さらに、最近の外国人観光客には従来とは異なる特徴があり、その対策が特に地方においてハードルの高い課題となっている。

研究の内容 (方法・経過等)

急増する外国人観光客の対応に課題を抱える「盛岡観光コンベンション協会」「盛岡手づくり村」「盛岡市教育委員会歴史文化課」、および弊社「JTB東北 法人営業盛岡支店」で共同研究グループを結成した。盛岡の地場産業を網羅した体験型観光施設である「盛岡手づくり村」においては、急増する外国人が、かつての英語圏や韓国・中国語圏に加え、タイを始めとするアジア圏からの観光客に拡がり、その対応に頭を悩ませている。盛岡市教育委員会では、盛岡市内に点在する歴史・文化施設の外国人観光客に向けた情報発信に苦慮している。また、協働研究全体のサポートを担う「盛岡観光コンベンション協会」、実際に観光客誘致を行う弊社「JTB東北 法人営業盛岡支店」との協議では、外国人観光客の誘客に当たっては、日本人観光客とは異なる視点に立った魅力的な観光資源の開発が待たれるとの課題が示された。本研究では、県立大学で独自に開発されたユビキタス通信機能を有する携帯情報端末を専用ガイド機として用い、多言語での対応が必要になる外国人観光客へのスマート対応を実現する上での課題を明確して、その解決手段を確立する。特に、本サービスの優れたインターフェースは、外国人観光客の動向研究を実施する上で、操作説明を受けなくともただちに利用開始可能といった点が強みになるはずである。

これまで得られた研究の成果

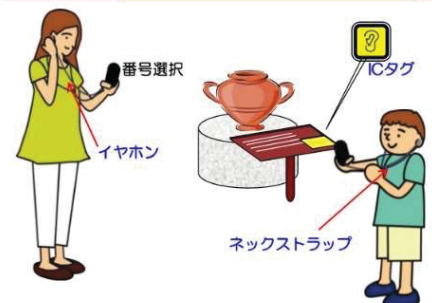
本協働研究に参加している「盛岡市てづくり村」において、来村の外国人に岩手県立大学が開発したユビキタス通信小型端末を貸与し、あらかじめ村内特定場所に設置した、ICタグや近距離無線タグにより、回遊する外国人がタグに近づいた際に自動的にコンテンツを再生する仕組みを構築して意識がどう変化するかアンケート形式による調査研究を行う。盛岡市手づくり村の協力で、盛岡市てづくり村に16場所に独自に開発した無線アクティブタグと看板を設置した。また、各場所(出店)に、日本語と中国語と英語のコンテンツを作成し、音声データを編集した。専用端末29台を用意し、台湾の団体観光客に依頼し、解説案内を利用してもらった。そのあと、観光客の利用感想を調査するために、アンケート調査を行った。アンケート調査の結果集計によって、**97%**の高い割合で、本研究が提供するマルチ言語の自動案内サービスは効果的なアプローチであることが確認された。このサービスによって、地方の工芸品と特産品の理解を深める効果ははっきりである。このサービスの普及によって、地方観光の振興には、本研究で提案したアプローチの効果があると確認された。今回の研究の成果を活かして、東北地域の地域展示施設での展示案内サービスを実現するために、現地調査とICTによるサービスの普及を推進する予定である。

ガイドンスポイントに入ると...

ガイドンスポイントのエリア範囲は、設定可能です。



自動的にガイドンス開始



次世代地域防災リーダー育成プロジェクト！

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：中学生の活動を核とした「地域のつながり」再生による地域減災システムの構築
研究代表者：総合政策学部 教授 伊藤英之
課題提案者：小野寺 邦俊（岩手町立川口中学校 教諭）
研究メンバー：杉本伸一（地域政策研究センター客員教授）
技術キーワード：レジリエンス，地域学習，異世代交流，災害防除

▼研究の概要（背景・目標）

岩手町は、平日の昼夜人口の変動が著しく、平日日中は高齢者等、災害時要援護者が多く残留している。このため、平日に地震、洪水等の自然災害が発生した場合、消防・防災活動の担い手がほとんどいないことになる。従って、現中学生を災害時の「地域の防災リーダー」として育成し、合わせて中学生と地域とのつながりを防災イベントや教育を通して再生を図り、レジリエントな地域再生を試みた。さらに教員の異動に伴う防災教育の断絶を防ぐため、教材のデータベース化を図った。



図1 3Dプリンターを使ったハザードマップ学習

▼研究の内容（方法・経過）

【研究の目標】

2013年から現在までの研究成果を、中学校側へ技術移転する。

- (1)防災教育プログラムの簡素化・簡略化と授業実施による検証
- (2)画像保存とデータベース化
- (3)教育成果の地域への情報発信
- (4)既存施設の活用による防災学習の総合化



図2 ブロック玩具を用いた災害に強いまちづくりワーク

▼おわりに（まとめ・今後の展開）

- 1.本研究成果を、川口中学校区(川口小学校・久保小学校)へ拡大し、小学校高学年から中学卒業までの4年間をシームレスに地域防災学習を行えるように展開を図る。
- 2.岩手県教育委員会とも連携を行い、本プログラムを全県展開可能なように検討を行う。

～ICTで保育業務支援～

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：ICTの導入による保育業務効率化に関する研究

研究代表者：社会福祉学部 准教授 井上孝之

課題提案者：岩手県保健福祉部、岩手県社会福祉協議会

研究メンバー：佐々木 淳（ソフトウェア情報学部）、日向秀樹（岩手県保健福祉部）、
星 拓史（岩手県社会福祉協議会）

技術キーワード：ICT化推進、子ども・子育て新制度、保育業務支援システム

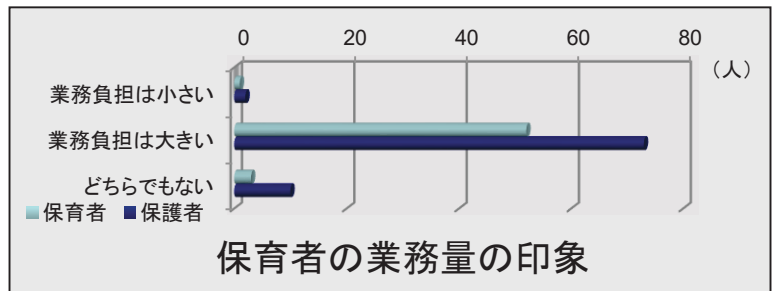
▼研究の概要（背景・目標）

平成28年、厚生労働省は「ICT化推進のための保育業務支援システムの導入に必要な経費の一部を補助する」ことを示した。本研究では、岩手県内の保育士や保護者のICTへの関心や意向を探り、保育業務の効率化や有益なICT導入のあり方を明らかにする。



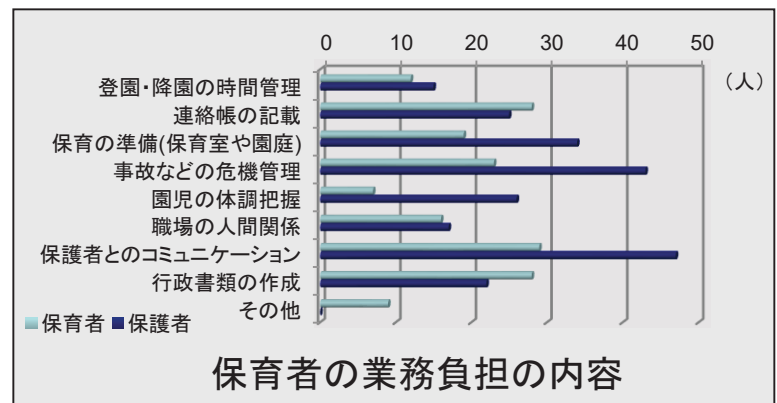
▼研究の内容（方法・経過）

1. 調査対象：①保育者56名（園長、主任保育士） ②保護者85名（二戸市他）
2. 調査内容：①ICT化による業務軽減についてワールド・カフェを通して集合知を回収・分析した。②保育者の負担感やICT導入による期待等をインタビュー調査。
3. 調査期間：①2016年12月 ②2016年9月～10月



▼研究の成果（結論・考察）

1. 保育者も保護者も、保育業務は負担が大きいと感じている。双方とも人間関係づくりに負担を感じている。
2. 保育者は「連絡帳の記載」や「行政書類の作成」に負担を感じている。
3. 保護者は「園の保育内容がわかる」「園からの連絡の迅速さ」を上位に挙げている。



▼おわりに（まとめ・今後の展開）

1. これらの結果から、保育者には文書作成にかかる負担をICT化により軽減して行くことが求められる。
2. 保護者には、保育内容や園との連携にかかる不安解消に役立つコンテンツの開発が課題である。
3. 調査実施にあたり、ご協力いただいた岩手ITの阿部氏、幸野氏に感謝申し上げます。

課題名：盛岡市内における空き家を含む有休不動産の3D データベース化と、
作成した データベースの地域活性化への活用方法の検討

研究代表者：総合政策学部 教授 倉原宗孝

課題提案者：細川智徳（(株) 恵PCM）

研究メンバー：明戸 均（もりおか八幡界隈まちづくりの会）、川村 智（盛岡市都市整備部
景観政策課）、遠田 南（盛岡市商工観光部商工課）

技術キーワード：空き家、3D映像、リノベーションまちづくり、データベース

▼研究の概要（背景・視点）

空き家の取扱が全国で大きな課題になっている。本県の空き家率は14%程度となるが、こうした空き家の存在はそのまま地域の衰退につながることから、地域全体でのトータル的な空き家活用方法を検討することが必要となっている。同時に空き家を単なる量として取り扱うのではなく、歴史・文化、暮らしや生業など各種の地域文脈から位置づけ、対応・活用方策を検討していくことが必要・重要ではないか。本研究の問題意識と重要性はここにある。

▼研究の内容（方法・経過）

盛岡市八幡町界隈を対象にして、空き家など遊休不動産の3Dデータベース化を行い、それを素材にした当該地区の整備・活性化などに向けた景観まちづくりのフォーラムを開催した。またそれと平行して全国のリノベーションなどを題材にした事例の視察、考察などを行い、今後の空き家を含む遊休不動産の活用展開について検討した。

▼空き家等のデータベース化と映像作成



当該地区の空き家等の現状をデータベース化し、各建造物、街路、景観などを視覚化する映像を作成した(図、左、1、2番目)。いったん入力した情報は蓄積され、利用価値も高い。建造物、街路、景観などの整備・活用に向けた検討、イメージ共有等に有効。また空き家等を単なる量・数としてではなく、地域の文脈から見た質に着目する議論、計画策定に有効な素材となる。また今回は、街区整備の具体的な取り組みの一つとして、街路を構成する各住戸の共通ツールとしての門灯を提示してみた(図左、3、4番目)。



共通ツールとしての門灯案

▼先進事例の視察、情報収集から

■リノベーションまちづくり(北九州市)

リノベーションまちづくりの先進地とされる北九州市。一定の街区への行政からの集中投資により点から面(街区)への波及を狙う、コストをかけない、かけ過ぎないなど学ぶ点も多い。



■油津商店街(日南市)

古びた商店街及び周辺環境の整備により活性化が狙われている。牽引力と成るリーダー(キーマン)の存在が鍵となっているようだ。



■西の原(波佐見町)

焼き物で有名な波佐見町だが、地場産業に由来する老朽建造物を改修・活用。歴史性や物語性の重要性を感じた。芸術面からのアプローチも有効。



▼フォーラム開催と今後に向けた展開



3D化映像等をもとに街の整備に向けたフォーラムを開催。今後が期待されるまちづくりが動き始めた。ただしその具体成果は今後の課題である。ご協力頂いた関係者の方に深く感謝すると共に、引き続き活動促進に参加参画していきたい。

～岩手県の新人保健師の1年後の実践は？～

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：岩手県新人保健師研修の評価に関する研究

研究代表者：看護学部 講師 岩淵光子

課題提案者：岩手県環境保健研究センター 主査専門研究員 三浦紀恵

研究メンバー：田口美喜子、藤村史穂子(看護学部)、海上長子(岩手県環境保健研究センター)、佐藤雅子(前岩手県保健福祉部健康国保課)

技術キーワード：新人保健師研修会、評価、人材育成、職場内研修

▼研究の概要(背景・目標)

平成23年3月の東日本大震災以降、岩手県内の自治体で保健師の積極的な採用がみられたことから、岩手県は「岩手県新人保健師研修会」を毎年実施している。平成27年度研修(表)の1年後の成果、課題を明らかにすることを目的とした。

▼研究の内容(方法・経過)

1. 調査対象:平成27年度新人研修会を受講した平成27年度採用新人保健師と新人保健師が所属する現任教員担当保健師
2. 調査内容:『記録の書き方』と『面接技法』が業務に活かされているのか、1年後の変化、職場内研修の現状
3. 調査期間:平成28年8月～11月
4. 調査方法:質問紙調査、面接調査

▼研究の成果(結論・考察)

1. 新人保健師は、研修内容の項目はほぼ実践できていたと自己評価していた(図1、図2)。
2. 現任教員担当保健師は、新人保健師が【面接や電話対応が向上した】【簡潔明瞭に記録できるようになった】ことや、【住民や関係機関から連絡が入るようになった】と変化を捉えていた。
3. 職場での現任教員(図3)では、<職場の現任教員教育計画の作成>の実施は全国調査(日本看護協会, 2015)と同様に低かった。

▼おわりに(まとめ・今後の展開)

1. 本研究で得られた成果をモデルとして、新人保健師研修会を進めていきたい。
2. 残された課題の実践の定着に結びつきにくい項目の演習方法の再検討や長期的な評価の検討、職場での現任教員教育計画の作成により新人の目標を可視化し組織の合意を取っていく方策の検討が必要である。
3. 調査実施にあたり、ご協力いただきました岩手県内の新人保健師及び現任教員担当者の皆様に深謝いたします。

表 平成27年度第1回新人保健師研修会開催内容

開催日	平成27年8月24日(月)10時～16時
内容	講義1「記録の書き方」 講師 元杏林大学保健学部看護学科 教授 塚原洋子 氏 演習「グループワーク 記録の振り返り」 講義2「保健活動における面接技法を学ぶ」 講師 元杏林大学保健学部看護学科 教授 塚原洋子 氏 演習「ロールプレイ 面接技法の実際について」

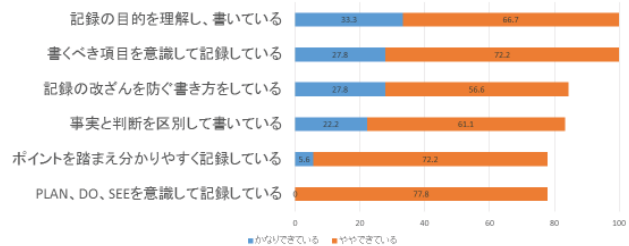


図1 記録の書き方の1年後の状況

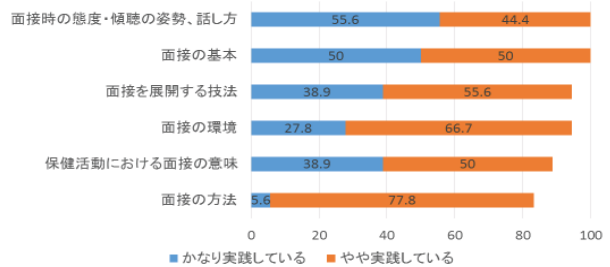


図2 面接技法の1年後の状況

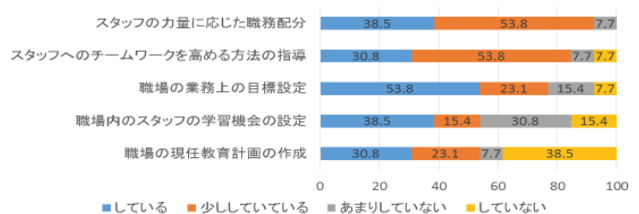


図3 職場での現任教員の実施状況

平庭高原の白樺林の再生を目指して

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：久慈市平庭高原におけるシラカンバ林の再生
 研究代表者：総合政策学部 准教授 島田直明
 課題提案者：久慈市山形総合支所産業建設課 谷地 彰
 研究メンバー：渋谷晃太郎（総合政策学部）
 技術キーワード：平庭高原、シラカンバ林、再生方法

▼研究の背景・目標

久慈市平庭高原のシラカンバ林は、地域の景観資源として重要であるが、次世代となる稚樹は認められない。シラカンバ林の効果的な再生手法を検討することが急務となっている。そこでここでは現況を調査し、伐採などの管理を行うことで、シラカンバ林の再生手法について検討を行う。



写真1 伐採区



写真2 白樺園

▼調査方法

- ①シラカンバ林現状調査: シラカンバ優占林3か所において、毎木調査を行い、林分構造を把握した。
- ②シラカンバ稚樹発生環境調査: 2016年8月にシラカンバ林を30m×30m伐採し、そのうち15m×30mについては、落葉層の除去を行った。掻き起こし区および無処理区に稚樹調査用のラインを設定し、調査を行った。同様に伐採を行っていない林分においても、稚樹調査を行った。
- ③平庭高原の景観変遷調査: シラカンバ林の成立過程を明らかにするために、旧版地形図を用いて、景観編成の調査を行った。

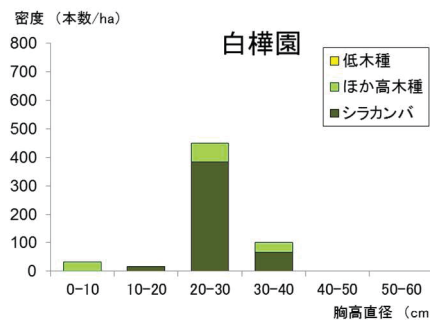
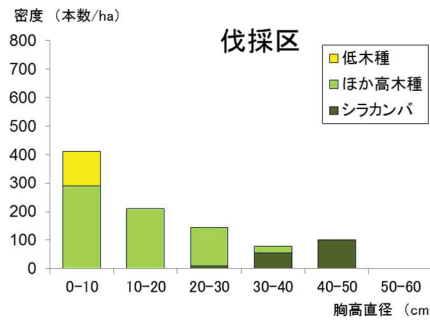


図1 毎木調査による林分構造

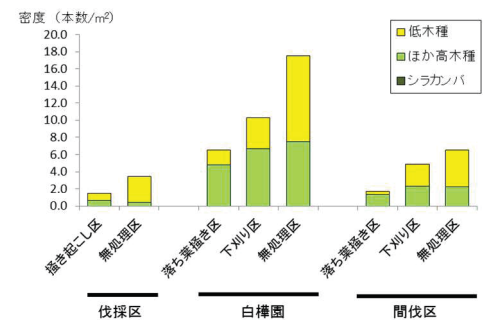


図2 稚樹の個体数密度

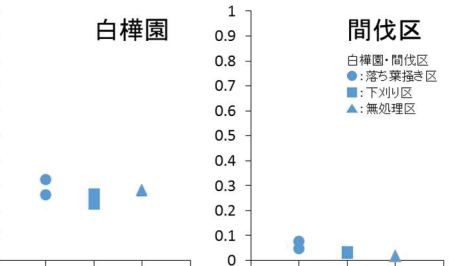
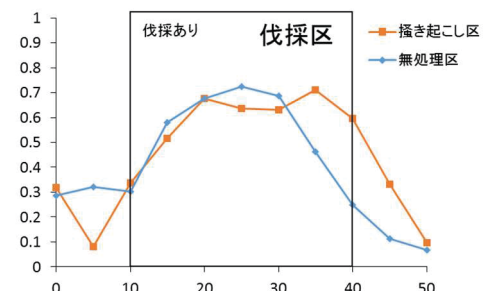


図3 相対光量子密度

▼結果・考察

- ① いずれの調査区においてもシラカンバは、直径が大きい個体が多く、小さい個体が見られない(図1)。
- ② 伐採や落葉層の除去を行ったが、シラカンバの稚樹は確認できなかった(図2)。
- ③ 稚樹は白樺園で多かった。これは、相対光量子密度が高かったことが原因であると考えられた(図3)。

▼おわりに

- ①現在の平庭高原のシラカンバ林には、次世代を担う稚樹は確認できず、このままではいずれ景観が大きく変化していく可能性が示唆された。
- ②伐採などを行い、シラカンバの再生を促す実験を行ったが、伐採後2か月では実生は確認できなかった。
- ③今後も継続的な調査を続け、シラカンバ林の再生手法について明らかにしていく予定である。



VR技術でリアルによみがえる九戸城

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名 : バーチャルリアリティを活用した九戸城跡の可視化に関する研究
 研究代表者 : ソフトウェア情報学部学部 准教授 プリマ オキ ディッキ A.
 課題提案者 : 二戸市産業振興部商工観光流通課 田山 裕之, 泉山 茂利樹
 研究メンバー : 伊藤 久祥 (ソフトウェア情報学部), 柴田 知二 (二戸市教育部文化財課)
 技術キーワード : 地域観光活性化, 地域経済活性化, 文化財保存, デジタルアーカイブ

研究の概要

岩手県二戸市の中心部にある九戸城跡は、九戸光政が築いたもので、豊臣秀吉天下統一の最後の合戦場となった場所である。平成元年度(1989)から開始された九戸城の環境整備事業により、本丸整地層の断面には焼土や木炭、焼かれた生活遺物や火縄銃弾丸など戦禍の痕跡が見られ、さらにその下位には地上で観察することのできない堀跡や溝跡など、九戸城時代の遺構が残されていることが明らかになった。本研究は、観光誘致を目的として、バーチャルリアリティ(VR)技術で九戸城を再現し、九戸城を含めた周辺環境の過去と現在の様子を体験できることを実現したものである。

研究の成果

製作した九戸城のVRは、バーチャルリアリティ用のHMD (HTC Vive) 上で実装した。体験者がVR空間内で自由自在に移動し、コントローラを利用して、事前に撮影した全天球映像と切り替えて現在と当時の様子を比較することができる。体験者から、これまでとは違う歴史体験を楽しむことができ、ガイドで説明できない部分を補うことが期待できるという意見が多かった。

本研究の成果は、文化財のデジタルアーカイブとして大きな意義がある。二戸市が進めている九戸城地域の官民連携による地方創生に寄与することが期待されており、最終的に先端的観光客誘致モデルとして、本事業を近隣観光地にも適用し、岩手県の観光産業を活性化することができると考えられる。

研究の内容

これまで行われた九戸城跡の発掘調査の結果や史料をもとに、九戸城のイメージ図を制作し、CGで表現可能な特徴的な部位を再現する。

- 建造物** : 本丸の門と橋の礎石と同年代の史跡を参考に、本丸と二ノ丸を中心にCGコンテンツを作成する。
- 地形** : 地形の起伏の変化や段差を表現するために、5m間隔の標高データを利用し、土塁の部分は手作業で再現する。
- 植物** : 出土炭化材と花粉の分析結果から、史跡九戸城跡の樹種が判明した。専門家と有識者と相談しながら、その分布を再現する。



九戸城跡(くのへじょうあと)は、岩手県二戸市福岡城ノ内にある日本の史跡です。現存している建物はありませんが、現地ではガイドハウスがオープンし、ボランティアガイドによる説明を聞くこともできます。2017年7月には“続日本100名城”に選ばれるなど注目を集めています。



九戸城VR
Kunohe Castle in Virtual Reality



～老人クラブに対するイメージを探る～

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：老人クラブ活動の活性の方策に関する実証的研究
 研究代表者：社会福祉学部 講師 菅野道生
 課題提案者：盛岡市老人クラブ連合会 事務局長 嵯峨直樹
 研究メンバー：吉田一彦、小田島晃子、藤澤勇、弥藤紘子（盛岡市長寿社会課）
 技術キーワード：老人クラブ 高齢者の社会参加

▼研究の概要（背景・目標）

高齢者の社会参加の受け皿としての役割を中心的に担ってきた老人クラブ活動の停滞が全国的な課題となっている。全国老人クラブ連合会によると、老人クラブの会員数は平成24年3月現在で約650万人と、ピーク時を約240万人近く下回っている。盛岡市でも、老人クラブの会員数がピーク時から約2000名減少している状況にある。老人クラブには、人々のライフスタイルの多様化や意識の変化に対応しながら活動のあり方を見直し、「新たなコミュニティ組織」としてのその活動をリニューアルしていくことが求められている。本研究は、上記の課題解決に取り組むべく、高齢者の社会参加ニーズの実態把握・分析を通じて、求められる老人クラブ活動のあり方と、市町村高齢者保健福祉行政による高齢者の社会参加活動支援のあり方をモデル的に提示することを目指した。

▼研究の内容（方法・経過）

盛岡市内の50歳・55歳・60歳・65歳・70歳・74歳の男女から無作為抽出した2,000人を対象にアンケート調査を実施した。実施時期は、2016年12月～2017年1月。調査方法は郵送法によるアンケート調査（自記式）とした。無効・不能票8票をのぞく有効回収は991票であり、最終的な有効回収率は49.6%だった。

7つの形容詞対リスト（①明るい/暗い、②やわらかい/かたい、③おもしろい/つまらない、④軽い/重い、⑤好き/きらい、⑥あたたかい/冷たい、⑦信頼できる/信頼できない）を作成し、老人クラブへのイメージを5件方で評価してもらった。回答結果を集計し老人クラブに対するイメージを測定する変数（イメージ得点：範囲7-35）を合成した。また興味関心のある活動メニューについてもたずねた。

▼研究の成果（結論・考察）とまとめ

老人クラブに対するイメージ得点を群別にみると、加入群が16.4点とややポジティブなイメージを持っているのに対して、対象年齢未達群は20.9点とポジティブでもネガティブでもないイメージ、非加入群は22.1点とややネガティブなイメージを持っていることが示された（図1）。これらの結果から、老人クラブに加入していない60歳以上の人も老人クラブに対するイメージは若干ネガティブ寄りではあるものの、極端にネガティブなイメージを有しているわけではないことが示唆された。

社会参加活動に対する興味・関心については、興味・関心がある人の割合は、全体では、ウォーキングなどの健康づくりは57.1%と高く、その他の活動は11.4%から22.4%であった。群ごとの比較を行った結果、グラウンドゴルフ、輪投げなどの軽スポーツ、お茶会などの近隣住民で集まる活動、地域の公園などの清掃活動、子どもの登下校時の見守り（スクールガード）、子供に昔の遊びを教えるなどの伝承活動、地域やサークルでの旅行、および地域でのお祭りは、いずれも加入群において高かった。これに対して、ウォーキングなどの健康づくり、老人ホームなどへの施設訪問、およびシルバー人材センターなどを通じた就労については、群差が認められなかった。これらの活動は、すでに老人クラブに加入している人もそうでない人も同程度に興味・関心を有していることが示された。老人クラブの新規会員の獲得に向けた方策として、健康づくりや就労の機会といった要素を打ち出していくことが有効であると考えられる。

今後、これらの知見を踏まえ、今後のクラブ加入促進に向けては、非加入者にもアピールする活動メニューの開発と豊富化を模索していく必要がある。

図1 加入有無別の老人クラブに対するイメージ得点と標準偏差

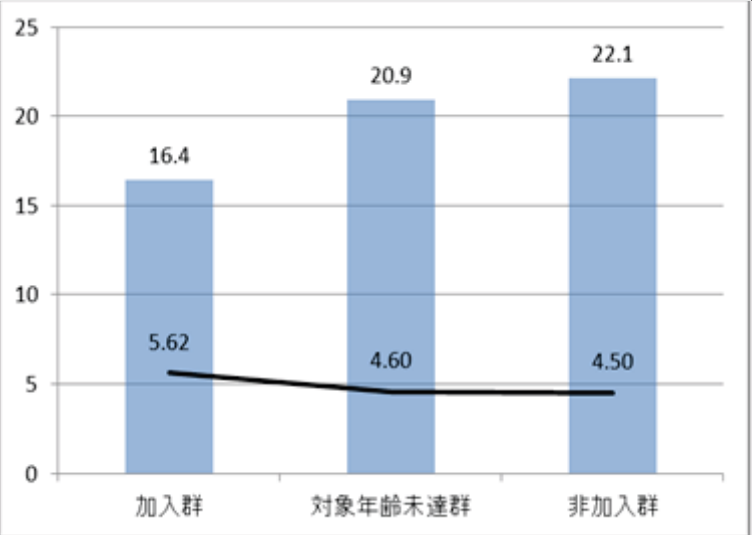


表1 加入有無別に見た「興味・関心のある活動」の内容

社会参加活動の種別	「興味・関心がある」の回答割合				χ ² 乗値
	加入群	対象年齢未達群	非加入群	全体	
グラウンドゴルフ、輪投げなどの軽スポーツ軽スポーツ (n=959)	49.2%	17.0%	19.5%	20.4%	32.74*
ウォーキングなどの健康づくり (n=967)	61.7%	56.3%	57.1%	57.1%	0.59
ひとり暮らしの高齢者の自宅への訪問活動 (n=961)	20.7%	12.3%	11.6%	12.4%	4.04
身体が不自由な方の家での清掃、除草、除雪など (n=958)	25.0%	13.5%	13.7%	14.3%	5.565
老人ホームなどへの施設訪問 (n=961)	19.0%	8.8%	11.8%	11.1%	5.688
お茶会などの近隣住民で集まる活動 (n=960)	48.3%	11.2%	14.9%	15.6%	52.20*
地域の公園などの清掃活動 (n=961)	51.7%	19.1%	28.1%	26.3%	29.49*
子どもの登下校時の見守り(スクールガード) (n=961)	36.2%	21.7%	18.3%	20.6%	10.66*
子どもに昔の遊びを教えるなどの伝承活動 (n=960)	31.0%	13.2%	11.2%	13.1%	18.13*
地域やサークルでの旅行 (n=964)	61.7%	12.9%	22.0%	21.3%	72.93*
地域でのお祭りなど (n=963)	59.3%	19.4%	20.4%	22.4%	49.31*
シルバー人材センターなどを通じた就労 (n=962)	20.3%	20.5%	20.3%	20.4%	0.01

*p<0.05

～文化財庭園のデジタルアーカイブとその活用～

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：史跡・名勝等のメディアシステムによる記録保存活用

研究代表者：ソフトウェア情報学部 教授 土井章男

課題提案者：盛岡市教育委員会・千葉仁一，今野公顕

研究メンバー：(株)TOKU PCM・榊原 健二・細川智徳，(株)タックエンジニアリング・原田昌大，(株)環境事業計画研究所・吉村龍二

技術キーワード：多文化共生

▼研究の概要(背景・目標)

盛岡市には国登録名勝の文化財庭園が2件(国登録記念物「旧南部氏別邸庭園」，同「南昌荘庭園」)，市条例指定保護庭園6件が存在する。いずれも中心市街地に所在し，都市化の進んだ市街地にこれほど数の庭園が存在することは，稀有な例といえる。しかしながら，盛岡ではその魅力の発信が十分なされていない。文化財庭園を3D計測することで，まちづくりや観光地PRに活用する(図1)。

▼研究の内容(方法・経過)

「旧南部氏別邸庭園」と「南昌荘庭園」，将来的に史跡指定を目指す「南部家墓所」等を対象に，3D計測装置と先端ソフトウェア技術を用いて，詳細でかつ迅速に計測できるデジタルアーカイブ(記録図化)の汎用性の高い技術を研究開発し，3Dモデルを構築する。

▼研究の成果(結論・考察)

南昌荘に対して，ドローンによるカメラ撮影と地上からのレーザ計測を行った。次に取得したカメラ画像から地形の座標値と色情報を持った3Dの点群データを生成した。本点群データは地上からのレーザ計測で得られた点群データと統合され，南昌荘全体の点群データを生成した(図2)。3D計測はDJI社S900(ドローン)，ソニー社α6300(高解像度カメラ)，FARO社Faro3D 120(レーザ計測)を利用した。

▼おわりに(まとめ・今後の展開)

3D計測装置を活用した文化財庭園や史跡のデジタル記録保存は，従来の手作業による実測図化図面に比べて，正確な3D情報を有しており，多くの活用法が想定される。例えば，インターネット上で多くの方々に庭園の見どころの解説，その庭園の持つ本質的な価値の周知，まちづくりや観光資源への活用である。

さらに従来の方法よりも迅速かつ安価，そして正確な3D情報を有した記録保存ができることが判明していることから，3D計測装置データを用いた保存管理手法の検討は，文化財にとって，新しくかつ極めて有効な保存管理の方法の一つとなり得ることを確信する。

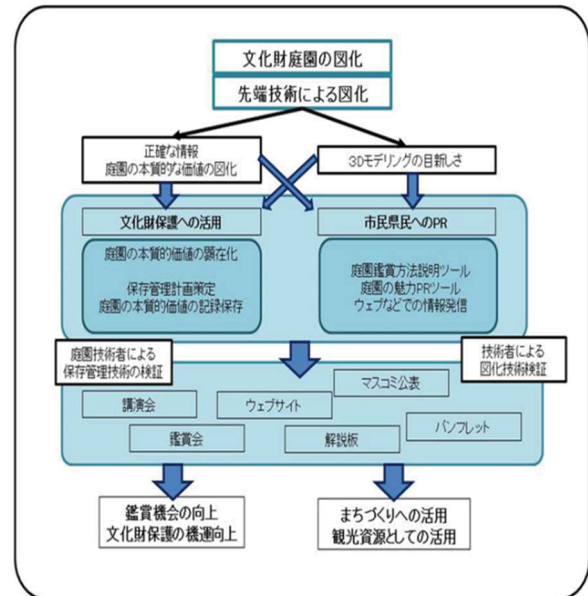


図1 全体の流れ

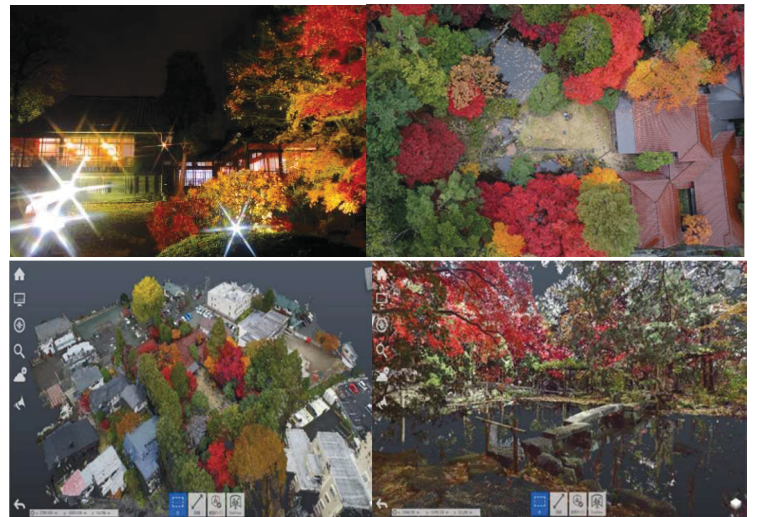


図2 3Dモデル化事例(左上:南昌荘, 右上:ドローンによる撮影画像, 左下:点群データ(上空から表示), 右下:点群データ(庭池))

木賊川遊水地：希少生物の緊急保全とその環境整備の試み

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：木賊川遊水地の希少生物の保全等に関する研究

研究代表者：総合政策学部 教授 豊島正幸

課題提案者：たきざわ環境パートナー会議

研究メンバー：金子与止男, 渋谷晃太郎, 島田直明, 辻盛生, 鈴木正貴 (以上 総合政策学部)

技術キーワード：遊水地整備、希少生物、外来植物、保全生物学、環境学習

▼研究の背景・目標

「木賊川」の治水対策の一環で、滝沢市穴口地区に「遊水地」と「分水路」が整備される予定である。

工事に先立つ環境調査(2012年度)では、整備予定地に約500種の植物が生育し、その中には希少種が複数含まれている。また、河川にも希少な魚介類が確認されている。このように、多様な生物相が見られる当該遊水地は、環境学習の場としても大変貴重である。

本研究では、この多様な生物相を、遊水地が整備された後も適切に保全していくために、第一段階として、希少生物が、現在、どこにどのような状態で生育・生息しているかを綿密な調査によって明らかにし、避難・移植等の措置を講ずべき場所をピンポイントで特定する。

▼研究の方法・経過

遊水地の概要： 「締切り堤」で隔てられた第1遊水地(20.6ha)と第2遊水地(10.4ha)のほか、「分水路」が整備される(図1)。

調査期間：平成28年度。

調査内容：① 植物調査(自然観察会;17回)、② 魚類・貝類調査(10月・1月)、③ 水環境調査(COD,酸素飽和度,全窒素ほか;5月から継続中)、④ 鳥類調査(9月～3月)、⑤ 森林植生・土地利用の変遷、および、木賊川の成り立ちの解明(空中写真、旧版地図、絵図を使用)

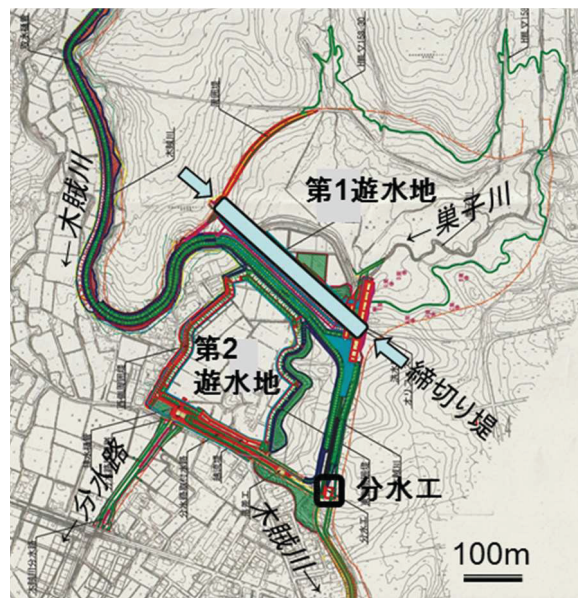


図1 木賊川遊水地の整備予定地

▼研究の成果

(1) 工事に伴い避難・移植の必要な希少植物が、複数特定された。

(2) 特定外来植物オオハンゴンソウの侵入が著しく、希少植物の生育を脅かしていた。その早期駆除が必要である。

(3) 希少な魚介類も複数確認された。また、新設された分水路でサケ仔魚が確認され、分水路がサケの再生産場となっている可能性が示唆された。河床材料の多様化等、魚介類の生息環境に配慮した河川の整備計画が望まれる。

(4) 農業用水路として明治初期につくられた現在の木賊川は、北上川と5m前後の落差工で隔てられ、言わば「陸封」された状態にある。新設予定の「分水路」に魚道が設置されれば、分水路を通して諸葛川-雫石川-北上川へのネットワークがつながり、魚類等の生息環境は格段に改善される。これが実現すれば、環境に配慮した歴史的な治水対策事業となろう。



写真1 地域住民との自然観察会

▼今後の展開：希少生物の緊急保全に向けた第二段階

① 避難・移植が必要な希少生物の移植方法の確立 ② オオハンゴンソウ等の抜き取り作業の継続 ③ 水田跡地の湛水域化(ビオトープづくり):これは、オオハンゴンソウ等の拡大を防ぐほか、鳥類を含む多様な生物の生息場となることが期待される。

～岩手県にバリアフリースターセンターを！～

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：観光におけるユニバーサルデザインの実践について

研究代表者：社会福祉学部 教授 狩野徹

課題提案者：岩手県保健福祉部地域福祉課 渡辺英浩

研究メンバー：阿部昭博(ソフトウェア情報学部)、吉田仁美(社会福祉学部)、松尾友子(岩手県地域保健福祉部福祉課)

技術キーワード：ユニバーサルデザイン、ユニバーサルツーリズム 観光 情報

▼研究の概要(背景・目標)

これまで、平成26年度の協働研究では、ひとにやさしいまちづくり推進指針の見直し(平成27年3月改訂)を行い次の段階として、本研究では、推進指針の具体的な推進方向を踏まえ、観光をテーマに具体的な取組の実践および方向性を提案することを目指す。



図1 旅館情報の事例1

▼研究の内容(方法・経過)

1. 岩手県のUTの実施状況の把握

県内の主な観光地について、特に平泉地区を中心にUTの現状を把握した。

2. UT支援体制の対応内容の検討

UTについて支援体制が継続的に実施できている先進的事例の状況を調査した。



図2 旅館情報の事例2

▼研究の成果(結論・考察)

1. 岩手県のバリアフリーの情報提供は十分でなく、支援拠点となる組織が必要である
2. 先進的なバリアフリースターセンターでは、提供情報の精度の良さ、内容の信憑性、宿泊や介助の斡旋など総合的にしているところがある。
3. 平泉地区を中心にイベント等を継続しながら組織づくりをしていく必要がある。



写真1 平泉中尊寺月見坂における車いす体験会の様子

▼おわりに(まとめ・今後の展開)

1. ユニバーサルツーリズムを支援する組織の必要性があるが岩手県にはまだ公式にはまだ無い。
2. 観光のユニバーサルデザイン化の必要性は理解していて、実戦も始まっている。
3. 先進事例では、責任のある情報を正確に提供し、場合によっては直接的支援をすることも必要である。
4. 継続し、精度の高いUT情報を収集すると共に支援組織の設立へつなげていく予定である。

～宮古・下閉伊の流域ビジョンは実現できるのか？～

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：宮古・下閉伊地域流域基本計画（流域ビジョン）の評価及び震災以降の沿岸地域流域の森・川・海における現状に即した「新・流域基本計画（宮古・下閉伊地域流域ビジョン）」の基本的方向性の提案

研究代表者：総合政策学部 准教授 泉 桂子

課題提案者：菊池修一・吉田拓司（岩手県 宮古保健福祉環境センター）

研究メンバー：大崎彩加・大澤仁志（総合政策学部）

キーワード：流域、森・川・海条例、漁業協同組合、市民団体

▼研究の背景

- ・ 岩手県：2003年「ふるさとの森と川と海の保全及び創造に関する条例」
- ・ 宮古・下閉伊地域流域：2004年保全・創造協議会設立、2005年流域基本計画（以下「現行ビジョン」）が策定
- ・ 地域は東日本大震災津波の被害・復興工事等により流域環境が大きく変化→地域の現状を多面的に再評価＋協議会構成メンバーの活動の衰退・協議会運営の見直しの必要性



写真 宮古市内協議会メンバー聞き取り

▼重茂漁協における沿岸漁業の復興とその環境保全の取り組み

- ・ 総販売金額は震災前の約8割に回復
- ・ 従来から養殖漁業に傾注・養殖わかめ・養殖こんぶがけん引役／環境保全は先駆的
- ・ 漁業就業者：震災前に比べ総数は減少 But 若年層が就業

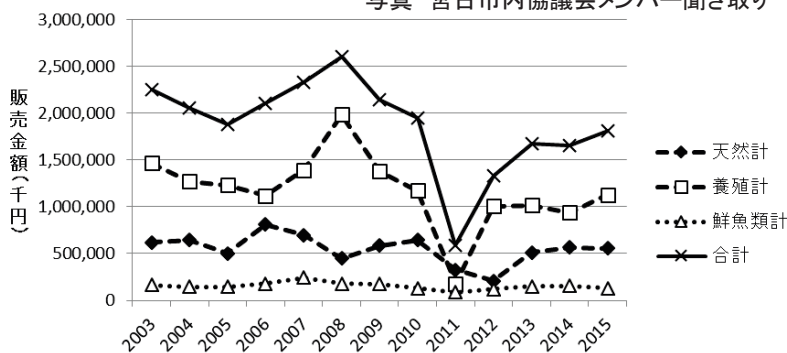


図1 重茂漁協における漁法別販売金額の推移

▼環境保全活動に関わる「市民」の属性

- ・ 宮古市内の保全・創造協議会メンバー→11月11日に聞き取り調査(N=6)
- ・ 宮古・下閉伊地域の環境関連市民団体(N=11)の担い手層に電話で聞き取り調査(山口, 2010を援用)
- ・ 設立年は2000年以降の団体が9団体(最古は60年代)。法人格は任意団体7団体、NPO法人6団体
- ・ 構成員の中央値19人。活動者の募集方法は「個人的な繋がり」が主
- ・ 会費徴収あり8団体、徴収なし6団体。平成27年度の活動資金は「10万円未満～49万円」が8団体

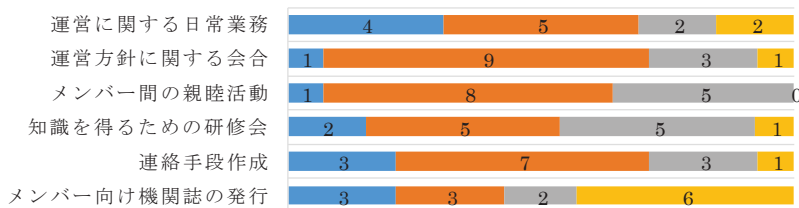


図2 団体内で行っている活動の頻度とその割合

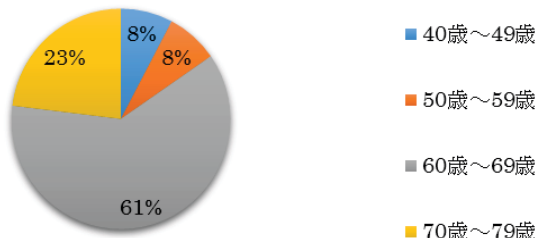


図3 団体の担い手層の年齢

▼まとめにかえて

市民団体は岩手県の市民団体支援策におおむね満足し、高い評価を与えている。その一方で現行ビジョンの認知度の低さ、保全・創造協議会での市民サイドの意見の政策への反映に課題が指摘された。市民団体に関する調査は今後、他の流域における保全・創造協議会や流域ビジョンについて研究を援用していくことも可能であろう。

調査にご協力いただいた重茂漁協の皆様、宮古・下閉伊地域の市民団体の皆様に心から感謝申し上げます。

～岩手のホームスパンを未来につなげる～

平成28年地域政策研究センター（地域提案型・前期）採択課題

課題名：岩手におけるホームスパン文化を継承するための方策に関する研究

研究代表者：盛岡短期大学部 教授 菊池直子

課題提案者：有限責任事業組合 まちの編集室

研究メンバー：佐藤恭子（盛岡短期大学部）、まちの編集室（滝沢市）

技術キーワード：ホームスパン、岩手の文化、ワークショップ

▼研究の概要（背景・目標）

岩手のホームスパン（手紡ぎ、手織りの毛織物）は、大正期に農家の副業として普及し、昭和期に民芸運動との結びつきによって美的価値が高められ、敗戦後の復興とともに地場産業にまで発展した。現在も受け継がれるホームスパンであるが、地元でも認知度が低下し、特に若い世代は知らない人の人が多い状況にある。ホームスパン文化を次世代に継承するためには、若い世代へのアプローチ等が必要と考え、その方策を探ることを目的とした。

▼研究の内容（方法・経過）

1. **ワークショップ** 2016年9月
目的：若者が工房での体験をとおしてホームスパンを理解し、「衣食住で考える私のほしいホームスパン」を提案する
体験者：18～36歳の17名（9班に組分け）
体験受入れ工房：盛岡市と近郊の6工房
2. 「ホームスパンmeeting」 2016年12月
目的：産学連携で岩手のホームスパンを考える（一般公開）
第一部：体験者9班によるプレゼンテーション
第二部：作家・職人をパネリストとするパネルディスカッション
3. **工房アンケート** 2017年3月
目的：研究方法を総括し、工房の意向を把握する
質問：①ワークショップと「ホームスパンmeeting」の振り返り
②10～20年後の工房について
③工房間や作家・職人のよこのつながりについて

▼研究の成果（結論・考察）

1. **ワークショップ**：若者にとってのホームスパンは、小物として用いる素材、特別な意味を持たせる素材
2. 「ホームスパンmeeting」：ホームスパンは触れたり身につけたりして価値がわかるもの。若い世代に触れる機会を伝えることが重要。しかし、工房は広報活動の余力を持ちえない現状にあり、文化の継承には行政による広報活動の支援が必要
3. **工房アンケート**：①ワークショップの有効性を確認
②技術継承を工房の後継者や教室の生徒に期待
③目的を明確にした交流機会のニーズを認識

体験者 (9班)	若者が提案する「衣食住で考える私のほしいホームスパン」				
A	親から子へのプレゼント	曲げわっぱの弁当包み	ブックカバー	ガウン	
B	親から子へのプレゼント	誕生祝のおくみ兼授乳ケブ	テーマ、コンセプトを決めた販売		
C	ポーチ	ティッシュカバー	コースター	マフラー	
D	ランチョンマット	コースター	ポケット付きストール	北欧テキスタイルのような柄物	
E	ポーチ	携帯ケース	アクセサリ	自動車内装品	ペット衣服
F	ペンダントライトのセード	ファブリックパネル			
G	スカート	つけ襟	携帯ケース	小物	アクセサリ
	ランチョンマット	コースター	クッションカバー	ブックカバー	カーテン
H	パソコンケース	携帯ケース	めがねケース	コインケース	衣服のポケット部分
	ポーチ	つけ襟	マフラー受注会＋パーソナルカラー診断	出産、入学祝い	
I	キーケース	マフラー	ストール	ワンピース	玄関マット
		小物類	販売企画品		



図1 ワークショップ



図2 ホームスパンmeeting

▼おわりに（まとめ・今後の展開）

1. 本研究の成果より、若い世代がホームスパンに触れることができる機会、目的を明確にした工房間の交流機会が必要であることが認められた。
2. 今後は、工房の意向を踏まえながら、行政による広報活動のバックアップが得られるような働きかけに展開したい。

<謝辞> 調査実施にあたり、ご協力いただいた蟻川工房、中村工房、みちのくあかね会、植田紀子織物工房の皆様、田中祐子氏、森由美子氏、舞良雅子氏に深く感謝申し上げます。

～三陸沿岸地域における簡易的な観光調査手法の構築～

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：三陸沿岸地域における簡易的な観光調査手法の構築

研究代表者：総合政策学部 講師 金澤悠介

課題提案者：岩手県政策地域部地域振興室 滝澤裕司

研究メンバー：新田義修(総合政策学部・准教授)

技術キーワード：観光、社会調査、公的統計の活用

▼研究の概要(背景・目標)

- ・ ある程度の精度をもちながら、低コストで実施できる調査方法の提案
- ・ 調査コストを高騰させる要因を特定した上で、公的統計の分析をもとに、そのコストを低減させる具体的方針を提示

▼研究の内容(方法・経過)

1. 調査対象:三陸沿岸地域
2. 分析方針
 - 調査地点と調査時点の選定
 - ✓ 公的統計(表1)をもとに、観光客の訪問パターンと観光産業の特徴を抽出
 - ✓ 三陸沿岸地域の観光状況を代表する地点と時点を選定

▼研究の成果(結論・考察)

- 調査地点の選定(表2)
宮古市・大船渡市・久慈市は三陸沿岸地域に訪れる観光客の大部分が集中している点で、調査地点として好適
- 調査時点の選定(図1)
4月から9月にかけて観光客入込数が多い点で、調査時点として好適

▼おわりに(まとめ・今後の展開)

- ◆ 三陸沿岸地域の観光状況を代表するようなかたちで観光調査を行いたいのであれば、(i)宮古市・大船渡市・久慈市の3都市を対象に、(ii)4月から9月にかけて開催される観光イベントをいくつか選定して調査を行なうことが効率的
- ◆ 政府や県が実施している公的統計の結果を適切に用いることで、さまざまな調査をある程度の精度をもちながら、低コストで実施することが可能

表1 使用した統計

使用した統計指標	出典
観光客の市町村別・月別入り込み数	岩手県観光統計概要(H25-27)
人口数	2015年国勢調査
就業者に占める観光産業就業者の割合	2015年国勢調査
就業者に占める第一次産業就業者の割合	2015年国勢調査
就業者に占める第二次産業就業者の割合	2015年国勢調査

表2 統計分析の結果

	グループⅠ	グループⅡ	グループⅢ	グループⅣ
自治体	宮古市・大船渡市・久慈市	陸前高田市・釜石市	住田町・山田町・普代村・野田村・洋野町	岩泉町・田野畑村
1年間の観光客数の平均値	1,086,534	329,170	299,695	475,626
沿岸地域を訪れた観光客に占めるシェア	51%	10%	24%	15%
観光関連産業就業者割合	26%	24%	21%	19%

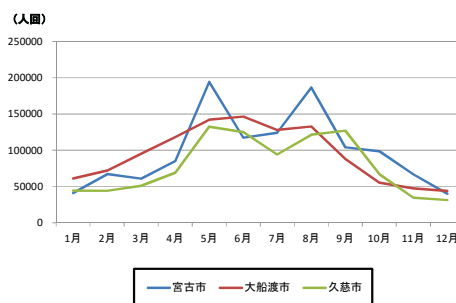


図1 宮古市・大船渡市・久慈市の月別観光入込数

三陸の海とともに ～岩手おらほのおなごたち～

平成28年度地域政策研究センター(地域提案型・前期)

課題名：「歴史に学ぶ“女性と復興”～昭和三陸大津波と家族、共同体～総集編Ⅱ」
研究代表者：宮古短期大学部教授 植田眞弘
課題提案者：岩手女性史を紡ぐ会
研究メンバー：伊藤工ミ子、植田朱美、祇園寺広子、花坂清美、山口照子（岩手女性史を紡ぐ会）
研究協力者：竹村祥子（岩手大学人文社会科学部）、桐座久子（ウイメンズスペース富山フェミニストカウンセラー）、柳原恵（お茶の水女子大学基幹研究員）

▼研究の経過

- ①平成24年度課題名「歴史に学ぶ“女性と復興～昭和三陸大津波と家族・共同体」
- ②平成25年度課題名「続・歴史に学ぶ“女性と復興”～昭和三陸大津波と家族・共同体」
- ③平成27年度、「津波をくつがえす～岩手おらほのおなごたち」（岩手女性史を紡ぐ会・会誌）として小冊子を作成。
- ④平成28年度、前年度の会誌の続編として「三陸の海とともに～岩手おらほのおなごたち～」（岩手女性史を紡ぐ会・会誌）を作成。

▼研究の概要

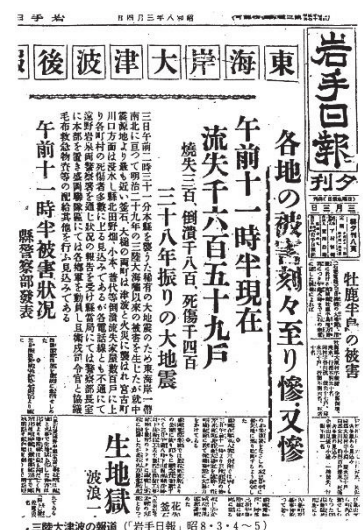
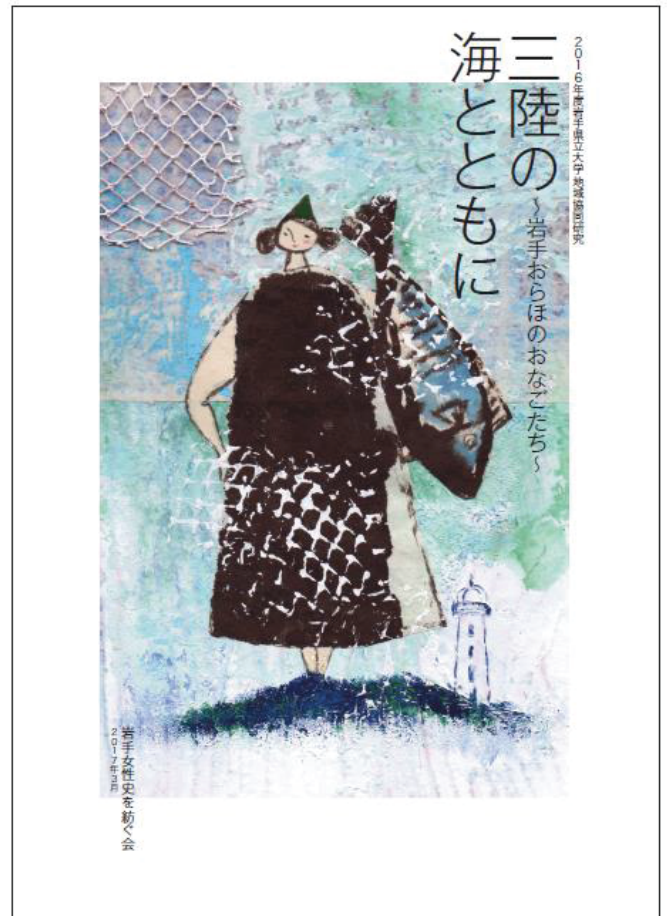
本研究では、水産業を生業とすることによって形成されてきた岩手県沿岸地域の家族・共同体のなかにあつて、地域の女性たちが昭和三陸大津波と復旧・復興過程、さらにその後の戦時体制に突入していく過酷な社会状況のなかで、どのような困難に見舞われたのか、さらに、それらの困難にどのように立ち向かっていったのかを、主に直接その時代を体験した女性たちに聞き取りを実施して纏めたものである。なお、本研究は昭和三陸大津波とその後を浮き彫りにして東日本大震災津波からの復旧・復興における教訓を得ることを目指したものである。

▼今後の取組み

聞き取りを中心にしたこれまでの調査研究の成果を教訓として、東日本大震災からの地域社会の復興に役立てる。

▼献辞と謝辞

語り手6名の故人のご冥福をお祈りするとともに御遺族のご協力に心から感謝申し上げます。



・三陸大津波の報道（岩手日報、昭8・3・4～5）

～社会的ひきこもり支援～

平成28年地域政策研究センター（地域提案型・前期）採択課題

課題名： 社会的ひきこもりの回復過程の考察及びロールモデルの作成
研究代表者：社会福祉学部 講師 川乗賀也
課題提案者：盛岡市役所市民部男女共同参画青少年課 課長 菅原由紀
研究メンバー：菅原由紀、佐々木繭子（盛岡市役所市民部男女共同参画青少年課）
技術キーワード：社会的ひきこもり、社会復帰、事例

▼研究の概要（背景・目標）

現代、日本ではひきこもりに対する社会的関心が集まっている。出現率は地域により報告が異なるが、ひきこもりに対しては内閣府や厚生労働省の施策等により支援の整備が進められてきた。たとえば、2009年に成立した「子ども・若者育成支援推進法」によって地域での支援体制の構築が求められ、2010年に出された「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」により、その地域での支援を担う機関として、医療機関、保健機関、福祉機関、NPOなどの民間組織が位置づけられている。ひきこもりは「様々な原因の結果として社会参加を回避し、原則的には6か月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態を指す現象概念」と定義され、特定の疾病状態や診断を示すものではない。したがって、個人のニーズに合わせた柔軟な支援が必要である。本調査では、ひきこもりから回復した元当事者8名からインタビューをおこない、回復過程を参考にロールモデルとして冊子を作成し、早期の相談を啓発することを目的とした。次に1例を示す。

▼おわりに（まとめ・今後の展開）

- ・発達障がいと診断されたものが今回のインタビューでは多かったが、診断されたがゆえに支援につながった可能性もある。
- ・今後、作成した冊子を活用しひきこもりについての啓発セミナーを実施し早期の相談につなげたい。

事例1

おとなしい性格、友人が少ない（幼少期～高校卒業）

おとなしい性格で、子どもの頃から友人は少なかった。小学校時代は、放課後に友達と遊ぶこともなく自宅でTVを見て過ごすことが多かった。学校にあまりなじみず高学年になると欠席しがちになった。中学校に入学しても状況は変わらず保健室でほとんどを過ごした。高校へ入学したが、休みがちになり2年生で退学。その後、2年ほど家で過ごしていたが、資格を取得しようと19歳で通信制高校に入学し、21歳で無事に卒業した。

高校卒業後ひきこもる（高校卒業後～ひきこもり期）

在学中には就職活動をしなかったため、卒業後は自宅でTVやインターネットをして毎日を過ごす。外に出たい気持ちと家に居たい気持ちの間で揺れ動き、どうしたらよいか分からず、ほとんど外出せず6年間ひきこもった。近所の人目が気になり、後ろめたく、家族にも申し訳ない気持ちだった。

インターネットで自分の状態を相談（動き始め～発達障がいの診断）

20代後半、自らインターネットのチャットなどで自分の状態を相談し、精神保健福祉センターに相談したほうがよいとアドバイスをもらう。30歳を目前に自分でも状況を変えたいという気持ちがあり、相談に行ったところ、メンタルクリニックの受診を勧められ、診察の結果「発達障がい」と診断された。

障害福祉サービスによる就労支援

主治医の勧めで障害者手帳を取得し、障害福祉サービスで就労支援を受けることを決意。地域にある障がいの者の就労支援事業所を紹介されて見学に行くと、自分と同じような悩みがある人が通っていた。「ここなら自分もがんばれる」と感じ、2年間通う中で、働くことに対するイメージが変化。「失敗したら怒られる」というイメージから「自分でも仕事ができるんだ」「楽しいな」という気持ちに変わった。

一般就労へ

一般企業での実習を終了し、人や社会に対する恐怖心が和らぎ、働きたい気持ちが高まった。就労支援事業所の紹介により無事にパートスタッフとして一般企業で働くことができた。

課題名：石神の丘美術館屋外展示場における情報を活用した魅力向上の研究
 研究代表者：ソフトウェア情報学部 教授 阿部昭博
 課題提案者：岩手町立石神の丘美術館 齋藤桃子
 研究メンバー：狩野徹（社会福祉学部）、齋藤桃子（石神の丘美術館）
 技術キーワード：野外美術館、森林セラピー、来館者支援、ICT利活用

▼研究の概要（背景・目標）

<背景> 森林セラピー基地認定^[1]によって、これまでよりも同美術館への来館目的や年齢層が多様化することが予想される。

<目的> 健康増進や癒しを求めて訪れる来館者への健康福祉面での情報支援の在り方について明らかにする。



石神の丘美術館の特徴と多様な来館者ニーズ

▼研究の内容（方法・経過）

1. 森林セラピー基地を有する他地域の情報発信の現状と課題を把握した。
2. 来館者へのアンケート調査を実施し、森林セラピーに対する認知度やニーズを分析した。
3. 心拍数を計測できるウェアラブルデバイスを用いたデモシステムを実証評価した。
4. 研修会を開催し、今後の森林セラピー活用と情報支援の在り方について検討した。



デモシステム



屋外展示場の森林セラピーロード®

▼研究の成果（結論・考察）

森林セラピー活用健康福祉面での情報支援の方向性について一定の知見を得た。

1. 森林セラピー基地全体の総合案内サイトを設け、その魅力や楽しみ方を広く発信する。
2. 健康増進型鑑賞支援ガイドシステムを導入し、来館者の多様なニーズや形態に対応する。
3. SNSを用いて、森林セラピーの活用方法や楽しみ方について地域で発信・共有する。



デモシステム体験会



森林セラピー活用研修会

▼おわりに（まとめ・今後の展開）

1. 本研究では、来館者の意向調査やウェアラブルデバイス活用に関するフィジビリティスタディ等を実施し、健康福祉面での情報支援の在り方について一定の知見を得た。
2. 施設運営側からの発信だけでは限界があるため、住民・行政も一体になって森林セラピー活用の可能性を探ってゆく取り組みが期待される。
3. 今後は、本研究の成果について段階的に実装へと繋げてゆきたい。

[1] 森林セラピー基地認定機関: 特定非営利活動法人森林セラピーソサエティ <http://www.fo-society.jp/therapy/>

～盛岡城復原を目指す、同時に残す形・意味を改めて問う～

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：史跡盛岡城跡の歴史的建造物復原に向けて

研究代表者：総合政策学部 教授 倉原宗孝

課題提案者：盛岡市教育委員会歴史文化課 三浦陽一

研究メンバー：似内啓邦(盛岡市都市整備部公園みどり課) 神山仁(日本城郭史学会盛岡支部長)

技術キーワード：盛岡城 史跡 整備・保存・活用

▼研究の概要(背景・目標)

本研究の究極の目的は、盛岡市の強いシンボルの一つで盛岡城の復原に向けて有効となる資料・情報を発掘することである。これはこれまでの経緯からも非常に難しい目的となるが、今回は有効な手掛かりの一つと想定されるロングフェローハウス(ポストン)での所在について探った。また難しい課題である資料発掘と同時に、今後の歴史的復元というテーマと共に市民に開かれ親しまれる史跡のあり方について調査、検討した。

▼盛岡城復原に向けた資料発掘(ロングフェローの残したものの)

本研究の究極の目的はお城復原のための根拠となる資料発掘である。その中でロングフェローが残した可能性のある写真発掘が今回の具体的なテーマの一つであった。結果から述べる。期待されたロングフェローによる写真は残念ながら確認出来なかった(あえて言えば「期待した写真は無い」ことが分かった)。ロングフェロー・ハウス(ポストン)に専門家・通訳を通じて所在の調査依頼がされたが、ハウスによる調査の結果、ロングフェローは「盛岡・岩手では写真は撮っていない(=盛岡城の写真は無い)」ことが知らされた。

他の資料の可能性について、明治・昭和初期の物はオークションで処分されており(特に貴重品・調度品など)、それらの販売先は分かるが、古文書については「ひと山いくら」といった扱いで散逸して分からない状況にある。過去にも悉皆調査が行われたが見あたらず、県図書館及び中央図書館についても見つからない現状がある。結果として、写真をはじめとする復原のための資料情報集めは今後への期待を込めた課題として残った。

ところで今回注目となった米国人、チャールズ・A・ロングフェローは明治4年5月に横浜港に到着(当時27歳)以降、およそ1年8ヶ月にわたり維新後の日本に滞在し、国内各地を巡り独自の視点から写真や記録など興味深い当時の情報を残している。彼は北海道に渡った帰路、盛岡にも立ち寄っている(明治4年10月19日)。その為、当時の盛岡城の写真が存在するのではという期待があったが、彼が残した当時の盛岡の様子をもとに想像力を飛ばたかす事も必要である。例えば、『日本滞在記』には、「10月19日(木)・・・城は南部藩藩主の館である。・・・垣根を通過して大きい松の木の並ぶ間を抜けて城の前提を横切り、途中鉄や銅で補強された重々しい扉をくぐると、間もなく城の中庭に立っていた。防壁は非常によい状態であった。二面の壁は大きく切った石で出来た高さ約50フィートの石垣で、上に銃眼の開いた胸しやうがあり、的が来襲すると木製の講師から矢が降り注ぐようになっている。全体が広い面積を占め不規則な形をしていて、火薬の時代になるまではほぼ無敵であったと思われる。・・・」など、盛岡城の様子が分かると共に、現存する盛岡城に佇むイメージが触発される。



チャールズ・A・ロングフェロー著、山田久美子訳、ロングフェロー日本滞在記、平凡社、2004より



▼歴史的意味・価値を維持した市民に開かれた空間へ

市民にとって親しまれ有効な史跡空間にしていくことをにらみ、全国事例視察も行った。史跡保存については時代の中で捉え方が変遷している。お城の象徴ともされる天守閣については昭和30年代以降、町のシンボルとして鉄筋コンクリートによる復原が全国的に展開されたが、「真に意味有る復原とはなにか」もあらためて問われている。幾つか紹介しておく。



小田原城:歴史性・市民性等の点で小田原城は注目される。復原に際し歴史文化財として丹念な調査が現在も進められているのと同時に、市民が一丸となって復原とまちづくりを盛り上げようとする機運も感じる。ボランティアの方々の気配りも光る。



福岡城:天守閣の復原を目指す盛岡城と比較して、福岡城の場合は天守閣のみが残っている史跡である。天守閣部分には見晴台が整備されており、そこから町を眺めることが当時の人々(城主)の立場・思いを喚起させるようで興味深い。



大阪城:観光客の数は群を抜く(大河ドラマの影響もあるかもしれない)。周辺の複数の駅からのアクセス、関連施設軍などお城を中心に周辺が一体的に整備されている。街から見える様子もシンボリックだ。バリアフリーへの配慮も本格的である。

おわりに(今後の期待と課題) 今回残念ながら復原に直接貢献する資料発見には至っていないが、悲観されるものではなく、今後への期待を孕む課題となる。同時に盛岡城の今後の保存・活用には、手段・技術のみではなく、保存のあり方、意味・価値まで含めた議論がさらに必要であろう。資料収集と共に引き続き取り組みたい。